

<p style="text-align: center;">かわら版</p> <p style="text-align: center;">(新春号 NO 4) 2013/01/01 発行</p> <p style="text-align: center;">年二回発行(1・7月)</p>	<p>下関市立大学落語研究会 OB 会発行</p> <p>電子版の扱いですので購読のためにはメールアドレスが必要となります。</p> <p style="text-align: center;">編集長 西川 隆喜</p> <p style="color: red;">※大学同窓会 HP でもご覧になれます。</p>
--	---

人権も科学技術も人心も

利権まみれで年改まる (NO4187)

みちのくの復興のその日まで全国の市大落研 OB がお支えすることを誓います!



(日和山公園の高杉晋作像)



(正門より大学全景)

【2013 年元旦 御慶】

笑和の好きな年賀です。むかしからマイペースで人生を歩いてきたひとです、落研でもわが道を行く人です。立川談志が好きで細いパッチのようなジーパンが好きです。

金艶は仁鶴のように四角い顔で真面目で、落研でただ一人四年間休むことなく授業に出てみんなのためにノートをとっていた人です。正義感も強くそのため後輩の信頼は厚く落研の背骨のような人です。

楽狂は真面目な遊び人です、パチンコ、麻雀が好きで一見遊び人のようですが、落語と落研を誰よりも愛した人です。古今亭円菊師匠が大好きで追い出しで鶴出世をやったほどです。円さんはおだやかで、面白くて楽しい愛すべき人です。落研の潤滑油のような役割を果たした人です。

私、笑司は落研の番頭でした色々なことの段取りをして、きりもりをしていく人です。落語の蒐集が趣味で、ラジオやテレビからの録音、録画を楽しんでいます。古今亭志ん生や志ん朝が好きで上方の桂枝雀が大好きな人です。

この五人が40年前に下関市立大学落語研究会を誕生させました。寄席を打つにも、なにもなく古いふすまに金色の折り紙を一面に張り、ちょうつがいをつなぎ屏風を作りました。楽狂が寄席文字を勉強して、めくりを書いたり、提灯に名前を書いたり、創世紀の苦労はそのまま楽しい出来事でした。

その落研が今もなお存続しているのは、我われにとっては奇跡のような思いに駆られます。後輩諸氏の努力に感謝するのみです。今更のように、古典落語のもつ魅力や力に驚嘆します。江戸の昔から今日まで語り継がれ、けっして変わることはない笑いや人情が永遠に引き継がれていくのだと思わざるを得ません。

今年は是非とも追い出し寄席に行ってみたいと思います。その感想は、また別の機会に書きたいと思います。最後に楽狂の病が一日も早く癒えることを願い皆様のご健勝と幸せを祈りつつ今年もよい年でありますように。

あばら家 笑司 (沖井 孝志) 昭和49年卒



沖井さんを思う時、必ず私の脳裏には家族のように面倒を見てくださった今は亡きお母様のことが思い出されます。4年生の頃はほとんど入り浸りで夕食とお風呂のお世話をおかけしました。今生では御恩に報いることが何一つ出来ませんでした。私がああの世に行った時は笑顔の絶えなかった長州のお母さんに真っ先にハグしようと思っています。楽しみに待っていてください! 合掌

(編集長)

【落研OB会 IN 神戸】

昨年、7月28(土)神戸三宮の甕屋(かめや)に於いて、オマリー先生の81歳の誕生会と銘打って落研のOB懇親会が開催されました。

特に今回はOBからの要望もあり、「米国人から見た日本・日本人」をテーマとして二時間半に亘り会食と並行してさまざまなお話を伺うことができました。なお、当日の会話はCDに収められ参加者には配布しましたが、一部はOBのために無料配布いたしておりますので、希望される方はメールでご連絡ください。

また、この場をお借りましてオマリー先生の足跡をお伝えするとともに、日本や日本人をこよなく愛した明治期の小泉八雲先生や先ごろ日本に帰化されたキーン・ドナルド先生のように他国の地、日本の土に戻ると決意されておられるオマリー先生のご健康とご多幸をお祈りするばかりです。

(ジョン・ルーク・オマリー先生の足跡)

- ①アイルランドからの移民の両親のもとに 1931(昭和 6)年 7 月 28 日、8 人兄弟の三男とシカゴで生まれる。10 歳の時に日米開戦が起こり、東洋の列強との戦に、大変なことになったと感じるとともに、米国人全てが団結して勝たねばならないと思ったと回想されている。
- ②イエズス会の神学校に学び、宣教のためインドに派遣されると思いきや、まさかの日本への派遣で、これに対して先生曰く「一日だけ考えさせて下さい」と言われたとのこと、理由は日本語は最も難しい語学であるため。
- ③1957(昭和 32)年 2 月 13 日、横浜港に上陸、一年ほどは横須賀で日本語・風俗・習慣を学ばれ、翌年より、上智大学で英語・社会学の教鞭をとられる。
- ④その後、下関、長崎、広島、神戸のカトリック教会にて聖職につかれ、イエズス会司祭としての職責を全うするとともに、下関市大、長崎大学、広島大学で学生を指導し今日に至る。日本在住 55 年になり、現在は神戸教会に所属。
- ⑤下関教会在籍期間は 1965 年～1978 年までの 13 年と最も長く、市大の名物講師として多くの学生に慕われ、教会でのお泊まり保育でオートミルやスクランブルエッグなど御馳走になった知人は数知れない。
- ⑥市大落語研究会客員顧問として 1976 年 1 月、卒業生の為にと「第三回追い出し寄席」で人生最初で最後の高座を踏む。人の 2 倍の反物で着物(和服)を新調する。小唄を英訳し満場の大喝采を受ける！！芸名は「快樂亭ホワイト」
- ⑧原爆投下により壊れた長崎浦上教会の瓦礫の中からアメリカ兵が米国へ持ち帰った「天使の頭」の像の日本への返還にご尽力いただき、1970(昭和 45)年 10 月にアメリカから長崎浦上教会へ返還された。



上左から幸本・森長・大塚・西川・青山
下左から千葉・先生 (敬称略)



(一息でロウソクは消えませんでした)

(神戸 OB 会回想 その 1)

皆様、新年明けましておめでとうございます。

昨年の私の落研関係の付き合いは、5月の「市大4年制移行50周年記念」でのオマリー先生お手伝い、7月の「オマリー先生在日55年・満81歳誕生記念パーティーIN神戸」出席、
メは12月に笑仲、好志、間島（落研専属？の写真部員で私の同期）、深田（笑仲の他クラブの先輩であり私の市大同期）の5人で行った銀座での忘年会でした。

年3回のうち2回もオマリー先生とお会いできた事は非常な喜びであります。

朗志大編集長より呂九笑および私に7月のオマリー先生誕生パーティーの様子をレポートしろとの命令がありましたが、私は少しだけ触れることとし、詳細は呂九笑に任せます。

当日は下関よりたゆうが、東京&千葉より好志と私が駆けつけ、関西在住の笑仲、朗志、呂九笑と神戸・三宮駅で合流し、オマリー先生を入れ総勢7名での誕生会となりました。少人数でしたが、オーダーメイドのケーキが用意され、料理も最高でした。オマリー先生も大変喜んでおられ、これが我々にとって何よりの土産となりました。

久しぶりの神戸・三宮を楽しむことなく翌日は下関へ帰省しましたので、単なる途中下車での飲み会と言った感じでしたが、みんなと会える事にひたすら喜びを感じる今日この頃です。

さて、今年巳年ですが、蛇は家の守り神、大地の主、お金を運んでくれる動物として崇められ神話や伝説によく登場し、脱皮することから、力強い生命力があると言われます。早生まれでなければ笑仲、晋平は還暦です。

巳年生まれは同情心があり、心が広く、知的で、品位は高尚で、温和な天性、たいていの事は成功するという天運にあるらしく、恩を忘れず、助けてくれた人には必ず恩返しするとのこと。皆さん！お願い事があったら笑仲、晋平に頼んでみてください。きっと叶えてくれるでしょう。アーメン！

春好亭 金艶（大塚 秋夫）昭和49年卒

(神戸 OB 会回想 その 2)

去る7月28日夏の暑い盛り神戸で開催されましたオマリー先生の誕生会という名目の懇親会の様子を報告させていただきます。開演当初から盛り上がり、お酒が入るにつれ馬鹿話ばかり、60前後の親父がまあここまで馬鹿ができることにあきれるばかり。小生もその一人であるが・・・。

今を忘れて当時あの汚い下宿、お金の無い学生時代、夜な夜な先輩の下宿先で遊び歩いてあの時にタイムスリップかのようなひと時。オマリー先生は「可・不可」が多い成績の中、

数少ない「優」頂いた先生（最も、出席をちゃんとすれば「優」が頂けるのであるが）。感謝、感謝。

一次会終了後、いざ二次会カラオケへ、昭和の迷曲であの懐かしいコンパ時代を彷彿。学生時代そのまま、あのころから成長していない事を改めて痛感し、又の再開を誓って散会。この会を企画していただいた朗志先輩、オマリー先生をアテンドして来てくれた笑仲先輩有難う御座いました。

さて私のことで恐縮ですが、昨年 2 月某スーパーを退職(役職定年)して子会社に転籍。いくばくかの退職金で借金を完済。今はその会社でゴミ屋の管理、おかげでこの年になって実習と研修で勉強しても(殆どしていないが)今更頭に入らない。とりあえず、「廃棄物管理士」の資格を取得（これも研修と簡単な試験で誰でも取れる）。関西圏の方、廃棄物のことなら電話一本で見積もりさせていただきます。

花見亭 呂九笑（幸本 秀哉）昭和 53 年卒



嫁と子どもには懐いているが所帯主は嫌われているチワワの「アロマ」
役には立たず金食い虫とのこと!

創部時代の愉快的仲間達！

第 1 回 春好亭 楽狂の巻

(愉快的仲間達 その 1)

入学式当日の事、校門近くを歩いているとヒョロヒョロとした人に呼び止められました。その方こそ誰あろう後にかずかずの逸話を創り、純心無垢な私をオカシナ人間に変貌させるきっかけをつくったあの あばら家笑和師匠（尼子和男さん）その人でした。

「落研に入らんか？」と軽—い口調で声をかけられました。その軽—い口調に幻惑され即座に入部を承諾してしまいました。まるで何かにとり憑かれたように……………。

「ほんなら入学式が終わったらあのプレハブの部室に来てくれ」と言い残しビーチサンダ

ルにポロシャツと言うイデ立ちでどこかに立ち去って行かれました。その後ろ姿を目で追いながら『しもうた！やられた。』と後悔したことを今でも鮮明に覚えています。

入学式がおわり、そのまま下宿に帰ろうかとも思いましたが、男として約束を反故にするのも何か気が引け、しぶしぶ重い足取りでプレハブの部室に向かいました。部室のドアを開けると笑和師匠のとなりにもう一人『大地にどっしり根をおろしたようなガッシリ体格の方が……そうですこの方こそ今回の主人公 春好亭楽狂師匠でした。』

楽狂師匠に出身地を聞かれ「広島です」と答えると、「一緒じゃー！俺も広島じゃー」と妙になれなれしく言われたことを昨日のこのように覚えています。後でわかった事ですが広島は広島でも楽狂師匠は猪が出没する〔沼隈郡〕私は政令指定都市〔広島市〕……一緒じゃない！全然違う！一緒と言うな！！ 人知れず泣きじゃくりました。

黒板に目をやると汚い字で 花見亭笑仲 と書いてありました。「変な芸名の人がおるもんじゃのう〜」「たぶん見た目も性格も変な人なんじゃろ〜」と心の中で呟いていました。その時です、楽狂師匠から耳を疑うような悪魔の囁きが「花見亭笑仲 え〜芸名じゃろう。」「今日からお前は 花見亭笑仲じゃ」……えー————！？うそじゃ〜！いやじゃ〜！時すでに遅し。在学中の4年間、落研はもとより学内で私の事を本名で呼んでくれる人は居なくなりました。学食のおばちゃん達からも「笑チャン、笑チャン」と呼ばれ続けました。しかし、笑チャンと呼びながら おばちゃん達は、定食や焼きチャンの盛りをよくしてくれました。学食のおばちゃん達の忘年会にも誘ってくれました。さすがに断りましたけど。そんな事も含め色々な事があり、だんだんと 花見亭笑仲という芸名が愛しく思えるようになりました。それと同時に、命名して下さった楽狂師匠への感謝と尊敬の念が芽生えたのは言うまでもありません。

「もしあの時 楽狂師匠との出会いが無かったら……」

「笑仲という芸名を頂いてなかったとしたら……」還暦近い歳になった今でも楽狂師匠への感謝と尊敬の気持ちになんら変わりはありません。今でも瞼を閉じると当時の楽狂師匠の様々な事が思い浮かんできます。

- 「庭」で焼き飯をおごってもらった事
- 寄席文字にかける直向な努力と信念
- 高座に上がるまでの凄まじい稽古量
- 門司看が大好きだった事
- コンパで、山本リンダの♪「狙い撃ち」♪を踊り狂いながら歌っていた姿
- 学祭のダンパで、もてようとして必死にダンスの練習をしていた姿
- 末代まで語り継がれる痛恨の落ち！！

八五郎とまちがえて「つる」を出世させてしまった事件

- 卒業後も奥さんの「さくら」さんに会う為、足繁く下関に来ていた姿
- 卒業が危くなりかけた「インラ食っちゃった」事件

まだまだ沢山ありますが、春好亭楽狂師匠の人としての優しさと愉快さが伝わりましたでしょうか？

後輩諸君よ！！師匠は福山で「不動産鑑定会社」を手広く経営されておられますので、

経済的に窮したらいつでも頼りに行って下さい。優しい心で必ず助けてくださると思います。

花見亭 笑仲 (森長 武) 昭和 51 年卒



孫の創太は生後 1 年ほどで見違えるほど成長している。爺さんかというと？ お揃いのカーディガン姿であるが、爺さんはともかく、孫世代が幸せに生きていける国であってほしいと神に祈る！

(愉快的仲間達 その 2)

楽狂さん、術後いかがお過ごしでしょうか？10月17日東京にこられた際、お会いできず残念でした。娘二人も片付き家内と二人だけの東京での落ち着いた生活をしていると、自由奔放に生きていた落研時代が無性に恋しくなります。今回の「かわら版」への投稿に際して『創部時代の愉快的仲間達 第一回 春好亭 楽狂』というお題を頂いたので、私なりにあれこれ思いをめぐらせました時、以下のキーワードが楽狂さんには適当だという結論に至りました。一つ一つは短い言葉ですが、OBの皆さまにおかれましても一度味わってみてくだされば幸いです。

- ・ 諸般の事情で卒業が 9 月となる
- ・ 就職するも早々と退職する
- ・ 独学で不動産鑑定士となる
- ・ 福山西ローターリークラブの幹事
- ・ 市大同窓会広島支部長
- ・ 大金持ち○△×？
- ・ 先輩で最初にラーメンをおごってくれた人
- ・ 追い出し寄席で「八五郎出世」が「鶴出世」に変わってしまった。
- ・ パチンコで生活費を稼いでいた人

ここ数年頻繁に落研 OB 会の懇親会が開かれるようになり、実のところ人生の楽しみが一つ増えたと喜んでいきます。今年は何処へ行けるのかなあ~ なんて楽しみながら暮らしております。新しい年を迎え落研 OB の皆さまにとって素晴らしい年であることを祈りつつ筆を降ろします。

あばら家 好志 (青山 剛三) 昭和 52 年卒

(愉快的仲間達 その3)

私は、岡山の中央部に位置する田舎で育ちました。本当にのんびりとした山間の村で高校まで暮らしたので、都会の人達と会話することが大の苦手でした。そのため、大学に進学したのをきっかけに落研に入り、人前で話すことが少しはできるようになろうと考えて落研に入部しました。当時知っていた落語家は、三枝・鶴光・仁鶴ぐらいでした。そして落研に入部し、春好亭遊狂という芸名をもらい楽狂さんの弟子となり、先輩が尊敬しているという古今亭志ん生師匠の弟子、円菊という落語家のことを教えてもらいましたが、実のところ名前も話も聞いたことがなく「どこかの花屋のおやじ」程度にしか思っていない感銘を受けられたということでした。そして、訳のわからない私に熱っぽく話してくれました。そんな楽狂さんの寄席での円菊さんばりの身体をくねくねさしたりする身ぶりや・手振り・語尾のうなり、等など本当に笑わせてくれました。一刻も早く病から癒えてあの名調子をまた聞かせてください。 春好亭 遊狂 (竹久 泰三) 昭和 52 年卒

【徒然草】

今年の夏、オマリー先生の誕生会で神戸に行った時のこと。

久しぶりに、新幹線に乗り新神戸へ。決められた時間より早めに、三宮へ向かう。行きかう人達はみんな若い。7月の最後の土曜日。にぎやかに楽しく、足取りも軽く。私とどンドンすれ違う。若い人達がこんなに大勢いる、やっぱ都会だ！！と感心していたら、前方になにやらくすんだ集団が！

そこだけグレーのオーラが漂う。周りは華やかで快活なピンクやオレンジなのに。体をくねらせ笑いこけるそのシルエット。手振り身振りでなにやら大きな声で話し合ってる人達・・・

ああ、そこには紛れもないあの落研の面々が!! 見事なまでに学生のときのままでの声、しぐさ、体型(お1人変わられてますが)。それを維持したまま年を重ねることができた奇跡。

すばらしいです。40年間老化とともに体の節々が衰え、仕事や家庭をその両肩に背負いご心痛・ご苦勞も並み大抵ではなかったはず。にもかかわらず 中身も外見も(ちょっと無理があるけど)変わらず年を重ねてこられたことは尊敬に値します。やはり落研のメンバーは特殊な能力をもった人達の集まりなんだ、と再認識した次第です。

学生のとき、落研のみんなで行動するとき、駅やバス停で時間つぶしのため みんなで固まってワイワイやってきましたよね。私はその輪に入れず ちょっとそばから見てました。でもそれは嫌じゃなかった。楽しくじゃれてるみなさんを見ているのは私も楽しかったです。そのときの感じがよみがえってきて、懐かしかったです。 花見亭 たゆう (千葉 里美) 昭和 53 年卒

【かけ橋】

『追い出し寄席』が1月7日(月)に下関市北部公民館(☎253-3371)で開催されます。開演は午後1時です。卒業生2人を含め8名が出演します。市内在住のOBの皆さまのご参加をお待ちしているとのことです。現在クラブ員14名(男女各7名)で会長は前回同様に坪井俊輔君が努めています。現役部員にとっても良い年であることを願っています。

(編集局電話取材による)

【編集後記】

100人の人が集まれば100通りのさまざまな人生がある。もちろんその一人一人が尊重される社会であってほしいと願うと同時に、個々が自己確立され自立して生きていくことができる強い人であってほしいと思う。昨年は米国・ロシア・中国・韓国・南朝鮮、そして日本と、それぞれの国の政治代表者が時を同じくして変わった。それだけに、これからの日本の経済・防衛・外交政策にとって重要な年の始まりとなる。一方、我が国固有の問題だけでも経済の成長路線への転換、エネルギー、TPP、東北の復興、社会保障、財政赤字の再検、拉致被害者の救出等、挙げればきりが無い。

それらの中で将来の日本という国の存在を考えた時、最も優先順位の高いものは、公德心を含めた教育の確立であると思う。日本の教育制度は江戸時代において既に基本は確立していた。そのことは米国・ヨーロッパの列強諸国のジアの植民地化政策に唯一独立を維持できた国家であった事実を見れば解るであろう。

私はそれらを支えてきた要因の大なるものは、ほとんど単一民族で平等に古代より暮らしてきた日本固有の民主主義にあると考えている。いかなる社会においても各家庭は文化的、政治的、経済的、社会的の四つの機能を持っているし、中心となる父と母にはそれぞれの役割分担があり、それぞれ守られる必要がある。一方、家庭を引き受けられないものは何事も引き受けられない。健全な家庭のなかではじめて、子供は健全に育って行く。複数の家庭の繋がる地域社会は道徳の訓練場である。地域コミュニティの破壊が「恐るべき子供たち」を生んだ。同時にコミュニティ作りに住民の道徳感があらわれる。歴史なきローカリズムは道徳を破壊し、「住民とは何か」を問わない住民運動はエゴである。

最後に死生感が、道徳を鍛えることを忘れてはならない。現代人は死におびえているが、それを払拭するためには、まず死について語り合い、周囲との了解を高めることが大切だ。社会的に言えば、いたずらな延命や臓器移植は間違いで、生命至上主義がニヒリズムを蔓延させている。

